



中世鎌倉に見る寺院建築に関する研究 —浄光明寺仏殿について—

K03009 伊倉 孝浩

I はじめに

I-1 研究背景と目的

治承4年(1180)、源頼朝が鎌倉を拠点としたことで都市発展の幕が開いた。その後、鎌倉幕府が開かれると共に、この地は都市的・文化的に飛躍的な発展を遂げる。

なかでも、多くの争乱や地震が起こった時代背景の中で、仏教は庶民の間に広まり、新しい宗派も生まれた。同時に、寺院建築にも新たな様式が生まれる。鎌倉時代に禅宗寺院を中心に盛んに用いられた禅宗様がそれであり、鎌倉の地では円覚寺や建長寺がその代表といえる。

そのような背景から、鎌倉は平成4年に文化庁の世界遺産暫定リストにも登録された。しかし未だに遺産登録に至らず進展が見られなくなっている。周辺都市の参加により、遺産エリアと住宅地の線引きが確定していないということであるが、その背景の一つとして現存する中世木造建築遺構が少なく、鎌倉期の物は皆無であることが挙げられるのではないかと。そんな中、平成12年に発見、公開された「浄光明寺敷地絵図」は正安元年(1299)建立当時の仏殿の姿と共に、当時の都市の様子を伝える貴重な史料である。

そこで本研究では浄光明寺仏殿を対象とし、絵図等現存史料と同時代の寺院建築を分析することで、鎌倉期建立当時の仏殿の形態と共に、中世鎌倉寺院の変遷を明らかにすることを目的とする。

I-2 研究方法

- ①「浄光明寺敷地絵図」より、浄光明寺仏殿の意匠的特徴を分析する。
- ②『匠明』堂記集より「唐用三間仏殿の図」を読み解く。
- ③同年代の禅宗寺院である東漸寺釈迦堂及び円覚寺等の資料並びに見学により、中世の設計手法を分析する。
- ④①～③をもとに各部材を復元し、対象仏殿を3次元CADで立ち上げ、形態の詳細を明らかにする
- ⑤現存遺構と④との比較、絵巻等の分析により禅宗様建築の広がりを中心として中世鎌倉寺院の変遷を追う。

指導教員 伊藤 洋子 教授

II 浄光明寺について

II-1 歴史

浄光明寺は当初浄土宗であったが、江戸時代までは真言宗、天台宗、禅宗、律宗の四宗兼学の珍しい寺であった。現在は京都東山区・泉涌寺を本山とする真言宗の寺であり、鎌倉市扇が谷2-12-1に位置する。

建長3年 (1251)	・6代執権北条長時の発願により真阿上人を開山として建立。
正安元年 (1299)	・現在の本尊である木造阿彌陀三尊像が造立。大規模な伽藍整備が行われる。
正和3年 (1314)	・第三世住持、如仙房高恵は他の密律系寺院の僧侶とともに四宗興隆を発願。
寛文8年 (1668)	・現阿彌陀堂が造営される。

II-2 仏殿について

正安元年に造像された阿彌陀如来三尊を安置するために新造された建物と考えられるが、須弥壇は応仁2年(1468)に新造されたものである。

「浄光明寺敷地絵図」から推察される特徴について鈴木氏の論考『建築的観点から考察した「絵図」—火災を経て再建された禅宗系寺院』を参考にまとめた。なお、後述の復元の際の規模想定についてもこれを参考とする。方三間裳階付き・入母屋造で石敷の土間仏堂。屋根は檜皮葺か柿葺で、軒の先端が大きく反りあがっている。柱は円柱を禅宗様の礎盤上に据え、建具は中央三間に格子を立て、両端間火灯窓。以上は禅宗様に一般に見られる特徴であるが、特異な点として正面一間通りの裳階柱間の吹き放し、裳階屋根上の壁とそれを挟むように斗拱が二段あるが、詰組が見られないことが挙げられる。



図1 「浄光明寺敷地絵図」トレース図 仏殿部分

表1 中世の禅宗様仏殿遺構にみる柱間・斗拱決定法

建物名 (所在地・竣工年)	柱間(単位:分、中・脇・裳階の順)	完 数 尺	比	枝 割	巻斗幅と枝割との関係	脇巻斗と外端巻斗の関係	斗相と斗拱端間隔寸法	大斗外面=斗内面	基準寸法
● 功山寺仏殿 (山口 元治2年—1320)	1172・782・704		中:脇=3:2	なし		斗 違	不一致	成立	不明
○ 善福院釈迦堂 (和歌山 嘉禄2年—1327)	1105・705・605	各間11・7・6尺		不定		斗尻違	不一致		各間完数尺
● 永保寺開山堂 (岐阜 文和元年—1352)	774・523	中央間+脇間13尺	中:脇=3:2	なし	※m=斗拱間隔の1/6	斗 違	不一致	成立	中央間+脇間13尺
● 普濟寺仏殿 (京都 延文2年—1357)	814・542	総間19尺	中:脇=3:2	なし		斗 違	不一致	成立	総間19尺
● 正福寺地蔵堂 (東京 応永14年—1407)	801・568・435	中央間8尺	中:脇=10:7 脇:裳階=4:3	24・17・13		斗 違	不一致		中央間8尺
○ 清白寺仏殿 (山梨 応永22年—1415)	648・432・432	中央間6.5尺	中:脇=3:2	不定		斗尻違	不一致		中央間6.5尺
● 玉鳳院開山堂 (京都 室町初期)	1159・783		中:脇=3:2	なし		斗 違	不一致		(肘木幅)
○ 円覚寺舍利殿 (神奈川 室町時代)	740・557・415	中央間+脇間13尺	中:脇=4:3 脇:裳階=4:3	不定		斗 違	不一致	成立	中央間+脇間13尺
● 願恩庵本堂 (京都 永正3年—1506)	900・600	各間9尺・6尺	中:脇=3:2	なし	※m=斗拱間隔の1/6	斗 違	ほぼ一致	成立	中央間9尺 または巻斗幅5寸
● 不動院金堂 (広島 天文9年—1546)	1260・1260・672		中:脇=3:2 (側面)	肩垂木		斗尻違	不一致	成立	斗拱真々4尺2寸
● 円通寺本堂 (広島 天文年間)	1002・668	中央間1丈	中:脇=3:2	なし		斗 違	不一致		中央間1丈

凡例
m:巻斗長 σ:1枝寸法 t:下層地垂木幅
●:関口博士の実測値による。
○:修理工事報告書などの実測値による。
◎:名古屋工業大学内藤研究室の実測値による。

III 中世の禅宗様設計体系

禅宗様建築にみられる最も特徴的なものの一つとして斗拱の存在をあげることができる。中世以来中央間と脇間との比は3:2になるのが一般的で、この場合斗拱間隔は中央間と脇間で等しくなる。しかし、中世以前は枝割によって柱間が決定されておらず、柱間割と斗拱配置に関して例外的なものも多い。

そこで、中世の禅宗様建築について斗拱配置について分類すると以下3つのパターンに分けることができる。

- (1)柱間を完数尺(自然数)で規定し、斗拱間隔が中央間と脇間で異なる型。
- (2)基準柱間を完数尺で規定し、それに対する比で各柱間を決定しており、斗拱間隔が中央間と脇間で異なる型。
- (3)基準柱間を完数尺で規定し、それに対する比で各柱間を決定し、斗拱間隔が中央間と脇間で等しくなる型。

また、中世の斗拱設計法に関して近世の物との違いを述べると、第一に斗相(斗拱1備中の巻斗の間)に比べて斗拱端の間隔が大きくとられていることである。中世では枝割による整然とした柱間割がされていなかったために、水平方向の寸法上の逃げを取りやすくしていたと考えられる。一方、枝割が用いられた近世では、斗相と斗拱端の間隔はほぼ一致している。

次に脇の巻斗とその外の巻斗の位置を比較すると、中世の斗拱では、外側の巻斗が脇の巻斗の内側に重ならず隣接する立面(斗違)になるのが一般的であるのに対して、近世の斗拱では、外側の巻斗が脇の巻斗の内側に隠れる形で両者が重なる立面(斗尻違)になる物も多く見られる。

IV 浄光明寺仏殿の復元

IV-1 規模の想定

絵図に見られる特徴から浄光明寺仏殿の復元にあたり、方三間裳階付きの禅宗様仏殿を基本とする。斗拱については詰組が無いのは省略したものと考え、二段の斗拱は現存する遺構には見られず、詳細不明なため復元に際しては一般的な禅宗様の斗拱とする。また、裳階屋根の位置については絵図を参考に身舎柱の飛貫下端に納めるものとする。

まず、平面の想定であるが、現阿彌陀堂と創建当初の須弥壇が同じ大きさであると考え、来迎柱の柱間を現阿彌陀堂と同じとし、中央間の寸法を基準に東漸寺釈迦堂の柱間割を参考にして平面を求める。平面構成を見ると、他の中世の三間禅宗様仏殿遺構に比べてかなり大型な物になることがわかる。

柱については、現阿彌陀堂の物が当時の柱を転用している可能性が高く、柱径を同じとする。ただし、柱の長さについては禅宗様の特徴である柱端の粽が上下いずれかが無く切断されている形跡があるため、身舎柱は現在の物よりやや長くする。裳階柱は梁の仕口の位置と共に、絵図に中国的な特徴が強く見られることから宋の『营造法式』を基にして、身舎柱の半分ほどとする。

表2 東漸寺釈迦堂の柱間割による浄光明寺の想定寸法(尺)

	主屋中央間	同脇間	裳階梁間	総桁行
東漸寺釈迦堂	11.15	7.41	6.484	38.9
浄光明寺仏殿	14.0	9.33	8.16	49.0

IV-2 部材の設計

部材の設計に際しても東漸寺釈迦堂を参考に勧める訳だが、細部については不明な点も多く、「匠明」の木割を参考にした。中世では木割の概念は完成されていないとされるが、木割が中世設計手法の延長にあると考え、他部材とのバランスを考慮しながら参考にすることとした。

また、本研究では1尺=300mmと換算して文献から実際に寸法を算出するものとする。

i) 礎盤・礎石の設計

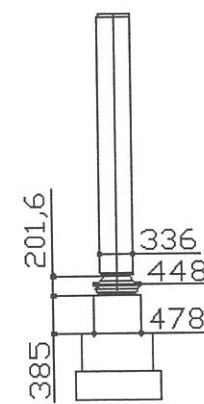


図2 裳階の礎石・礎盤寸法(単位: mm)

ii) 梁の設計

梁については「匠明」に記述があったが、他部材とのバランスから不適当と判断し、東漸寺の実測値を基とした。また、海老虹梁は裳階柱と身舎柱の差が大きいので裳階側と身舎側で高さを変えてもよかったが、現存遺構を参考として仕口の高さをほとんど変えなかった。同様に今回の復元では梁の絵様は無いものとする。

裳階柱と身舎柱の高さについては先述のように算定することができたが、来迎柱、大平束の高さについても大虹梁との兼ね合いから求めることができた。

iii) 斗拱の設計

斗拱の配置については先述した3つの類型の中から最も一般的で遺構に多く見られる「(3)基準柱間を完数尺で規定し、それに対する比で各柱間を決定し、斗拱間隔が中央間と脇間で等しくなる型」を用いる。

斗と肘木は「匠明」に細かく記載があるが、全体との兼ね合いから大きくなってしまい不適当であった。そこで、禅宗様の斗拱組が一つの独立した固体として考えられている特長を生かし、一つの斗拱を斗と肘木の比で設計し、柱間に応じた寸法を算定することとした。

斗と肘木の比を算定するに当たり、東京都の正福寺地

蔵堂(1407)の斗拱図を参考にした。図3は正福寺地蔵堂母屋の三手先詰組を0.135尺の方眼紙に当てはめて縮小した図である。

ここでは一備えの斗拱組をおよそ4.3尺としたが、中世では斗拱間隔を広く取ることを考えると、もっと小さくてもよかったかもしれない。

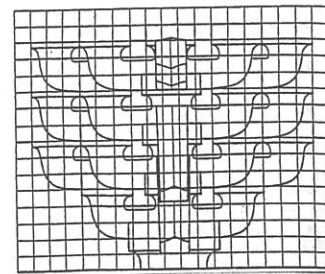


図3 正福寺地藏堂斗拱図

IV-3 現存遺構との比較

鎌倉の代表的禅宗様建築である円覚寺舍利殿と3次元CADで立ち上げた浄光明寺仏殿を比較してみる。創健の年代はそれぞれ室町時代と鎌倉後期である。

まず目に付くのは裳階と身舎のバランスの違いである。浄光明寺の方は裳階に対して身舎が非常に高く、不安定な印象を受ける。そのため裳階の屋根勾配は非常に緩やかで、雨の多い日本の気候にあったものではない。また、前面一間の吹き放しも禅宗様仏殿としては違和感がある。前面一間吹き放しという事で、方形を特徴とする禅宗様仏殿としてみると立面同様にバランスが悪く感じる。禅宗でも後に前面一間吹き放しの黄檗建築が出てくるが、このときには前面一間には黄檗天井と呼ばれる独特な天井を張ることで日本的な整合性を保っているといえる。つまり、非常に中国的だといえる。

以上から建築的観点から浄光明寺仏殿を見ると、宋の建築様式を形式的に模倣したもので、そこに日本的な機能性や美意識というものは見られず、禅宗様と呼ばれる建築様式とは一線を画すものであるといえる。

すなわち、宋の建築様式が日本に伝わり禅宗様に姿を変える過程の中で浄光明寺仏殿は宋様式の導入期と位置づけることができる。

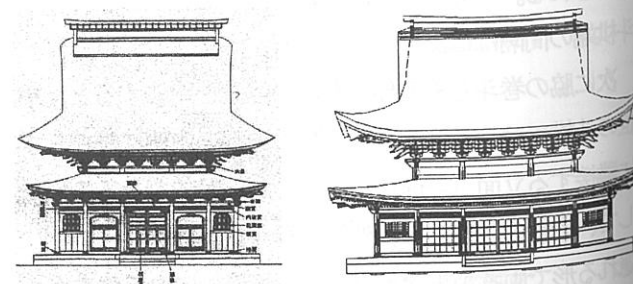


図4 円覚寺舍利殿と浄光明寺の立面の比較

表3 絵巻物に見られる禅宗様の建築

掲載文献	絵巻名	第三段	時代背景	写真
日本絵巻物全集5	吉備大臣入唐絵	第三段	8世紀中頃の唐	
日本絵巻物全集13	法然上人絵伝	第42巻	1233年 京都	
日本絵巻物全集20	幕帛絵	第六巻第二段	京都 13~14世紀	
日本絵巻物全集21	東征伝絵巻	第一巻第一段	8世紀始めの唐	
日本絵巻物全集21	東征伝絵巻	第一巻第六段	同上	
日本絵巻物全集21	東征伝絵巻	第三巻第二段	同上	
日本絵巻物全集21	東征伝絵巻	第四巻第一段	同上	
社寺参詣曼荼羅	八坂法観寺塔曼荼羅	京都 法観寺蔵	京都	
社寺参詣曼荼羅	法輪寺参詣曼荼羅	京都 法輪寺蔵	江戸初期製作	

VI 絵巻に見る禅宗様建築

絵巻で禅宗様建築の要素を持った寺院を探してみると想像以上にその数は少なかった。その中でも唐を描いた場面に禅宗様の特色を持った寺院が登場することが多く、禅宗様が中国から伝来したものであることをよく伝える。

絵巻物は鎌倉時代に盛んに描かれたが、説話的なものが多く、その場面として当時の鎌倉が出てくることはほとんど無いが、それでも鎌倉後期以降に禅宗様が普及し、全国的な広がりを見せると考えることもできる。しかし、禅宗様を完全に今に残す遺構が少ないということは、戦国という時代背景とともに、禅宗様建築が隆盛を極めた期間というものが、決して長いものではないといえ、鎌倉という都市と禅宗様式との関係性の重要度がうかがえる。

VII 終わりに

浄光明寺仏殿の復元設計を通して中世の都市「鎌倉」の寺院の在り方について考えてきたわけだが、本研究を通して感じたことは、当時の鎌倉の寺院は我々が現在知る禅宗様建築ではない、ということである。

鎌倉の寺院といえば円覚寺に代表される禅宗様建築が有名である。実際、元々浄土宗の寺であった浄光明寺にも禅宗様が用いられていることから、鎌倉においては禅宗様式が隆盛を極めていたといえる。ただし、鎌倉に禅宗様寺院が多いのは、寺院の建築様式を決定する最たる要素が宗派によっているわけではないといえる。禅宗様が禅寺に多く用いられているのは両者の導入期が同じだったことが大きい。寺院においてその伽藍配置などは宗教的に大きな意味を持つが、それぞれの建物の建築様式はそれぞれの嗜好や流行に合わせてさまざまな個性を持っていたのではないかと。

中国的な浄光明寺から我々が目にする日本的な禅宗様の遺構に移行するまでには様々な禅宗様もどきといえるような寺院が数多く存在していたのかもしれない。現在の鎌倉でそういった寺院を目にすることはできないが、いまだ多くの可能性を秘めた鎌倉は建築史において今後も重要な地であり続けるであろう。

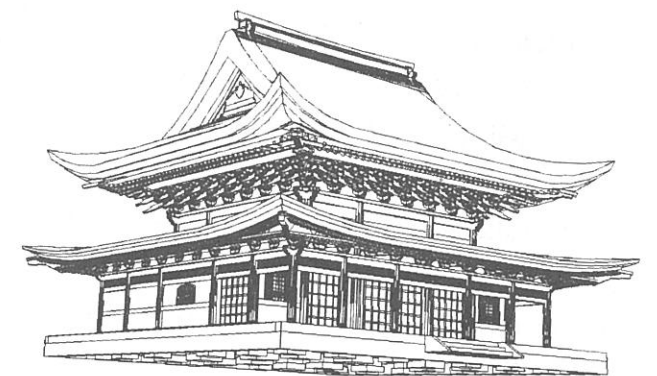


図5 浄光明寺仏殿 復元図

参考文献

- ・「浄光明寺敷地絵図の研究」 大三輪龍彦 (編) (株)新人物往來社 2005 年
- ・「日本建築古典叢書3」 河田克博 (編) 大龍堂書店 1988 年
- ・「匠明」 太田博太郎監修 鹿島出版会 1971 年
- ・「社寺建築の技術」 大森健二 (著) 理工学社 1998 年
- ・「日本絵巻物全集5 粉河寺縁起絵・吉備大臣入唐絵」 角川書店編集部 (編) 株式会社角川書店 1962 年
- ・「日本絵巻物全集13 法然上人絵伝」 角川書店編集部 (編) 株式会社角川書店 1961 年
- ・「日本絵巻物全集20 善信上人絵・幕帛絵」 宮崎圓恵 (編) 株式会社角川書店 1978 年
- ・「日本絵巻物全集21 東征伝絵巻」 亀田孜 (編) 株式会社角川書店 1978 年
- ・「社寺参詣曼荼羅」 (株)平凡社 大阪市立博物館 (編) 株式会社角川書店 1987 年